

モーツァルトとベートーヴェンの 八長調ミサ曲、その背景

- 曲目解説にかえて - 文・神谷一夫(バス)



= 以下は、当日のプログラムに掲載される前の原文です。
プログラム紙面の都合上割愛された原稿をここでは全文掲載します。文責 神谷一夫 =

ロマン・ロラン(1800 - 1944)は小説「ジャン・クリストフ」の中で、主人公がベートーヴェンに共感をいだく多くの場面を著述しているが、音楽研究「モーツァルト」では当時の音楽家の創作における人間像を興味深く述べている事に注目したい。

バッハは「粘り強く仕事をした」。彼は友人達によくこう言っていた。「私はやむを得ず仕事をしたのだ。誰でも私ぐらいに仕事をすれば、私ぐらいに成功するだろう」

ベートーヴェンは絶えず自分のデーモンと一騎打ちをやっていた。彼はスケッチし、瞑想し、削除し、訂正し、付け加え、やり直し、そして出来あがってしまったから、またやり直し、ずっと前に仕上がって印刷に回されているソナタのアダージオ冒頭に新たに2つの音符を付け加えたりしている。

モーツァルトはそんな苦勞を全く知らない。彼は自分が思う通り何でも出来るし、また出来る事しか考えない。彼の作品は彼の生命の移り香のようなものである。あの生きる苦勞しか考えない、美しい一輪の花のように。彼にあっては創作が非常に容易であったので、時にはそれが二重にも三重にも重なり、自分では意識していないのに信じがたいほどの力業になっている。彼はフーガを書きながらプレリュードを作曲する。ピアノとヴァイオリンのソナタを演奏するはずの音楽会の前夜11時から深夜にかけて作曲に取り掛かる。急いでヴァイオリンの部分だけを書き、ピアノ曲を書く時間が無くなり、合奏者と合わせている時間さえなく、彼は翌日頭の中で作曲済みの曲を楽譜なしに即興で演奏するという事例は百にも達する(ロマン・ローラン全集 野田良之訳、みすず書房)

さて、本日演奏するモーツァルト(Wolfgang Amadeus Mozart 1756-1791)の< 戴冠ミサ・八長調 KV317 > は彼が23歳の時、1779年3月23日ザルツブルクで作曲された。35歳という短い生涯のうち作曲数は626曲であったが、ミサ曲に関しては19曲。そのうち17曲がザルツブルク時代に完成した。しかも、長調ミサ曲が15曲もあった。モーツァルトはザルツブルクの司教と決裂し、ウィーン定住を決意(1781年5月9日)し、その後フリーの音楽家と

しての生涯をおくる(～1791)が、ウィーン時代のミサ曲は「レクイエムニ短調」と他の八長調の一曲のみであることが興味をひく。

ザルツブルク時代最後ともいえる3年間で私たちが現在特に親しんでいる作品に注目すると<フルートとハープのための協奏曲・八長調>KV - 299、<パリ交響曲・ニ長調>KV - 297、本日演奏する<戴冠ミサ・八長調>KV - 317、<バイオリンとヴィオラのための協奏交響曲・変ホ長調>KV - 364、<ミサ・ソレムニス・八長調>KV - 337など、永遠に輝く星の誕生時期であったことに気づく。

ところで「戴冠式ミサ」という名はモーツァルトが命名したものではない事に付言したい。この作品の表題には<del signor Amadeo Wolfgango Mozart, li 23 di marzo 1779>-聖母マリア様に、1779年3月23日、モーツァルト捧げるーとしか書いていないという。彼の姉の「ナンネルの日記」には祭壇に戴冠された聖母マリア像が掲げられているザルツブルグの小さなマリア・ブライン巡礼教会で演奏されたためとあるが、教会には演奏記録も無く、さらに巡礼教会の狭い空間でスコアに指示された楽器編成では無理であり、多分ザルツブルグ大聖堂用に書かれたものとされるに至っている。

この<ミサ・八長調>はシュテファン大聖堂など各地での演奏記録はあるが、いつ・誰が「戴冠ミサ」と名づけたかは定かでない。ザルツブルク・モーツァルテウム公文書保管人ヨハン・エバングリスト・エンクル氏の見解では、添え名「戴冠式」は既にヘッケル作品番号初版(1862)に載っているが、注に「戴冠式ミサ」の命名がどこから来たのかを誰の知らないと示されているという。

ベートーヴェン(Ludwig Van Beethoven 1770-1827)はモーツァルト生誕より14年後にボンで生まれた。モーツァルトが「戴冠ミサ」を発表した時、ベートーヴェンは幼年9歳であり、ピアノを習い始めた頃であった。それから28年後の1807年3月に本日演奏の<ミサ八長調(op.86)>がウィーンで作曲された。ハイドンの保護者ニコラウス・エステルハーゼ侯爵の依頼による作品だが、当時の貴族社会に依存する事に反発思想をもつベートーヴェンでも、経済的理由には勝てなかったと言われている。『ハイリゲンシュタットの遺書』によれば32歳頃から音楽家にとって致命的な難聴がベートーヴェンを襲ったという。その様な状況下で、36歳で<弦楽四重奏・ラズモフスキー>-OP. 59、<交響曲第四番・変ロ長調>-OP. 60、<ヴァイオリン協奏曲・ニ長調>-OP. 61、37歳で<コリオラン序曲・八短調>-OP. 62、<ミサ・八長調>-OP. 86、38歳<交響曲第五番・八短調・運命>-OP. 67、<交響曲第六番・ヘ長調・田園>-OP. 68、<合唱幻想曲・八短調>-OP. 80、39歳で<ピアノ協奏曲第五番・皇帝>-OP. 73、などの超傑作を次々と生み出し、驚くべき創作意欲であったことがうかがえる。難聴という絶望的な運命をも強靱な精神力で乗り越えている。ベートーヴェンのミサ曲に関しては、その後52歳(1822)の作品<ミサ・ソレムニス・ニ短調>-OP. 123のみであり、既に聴覚の衰えは激しく会話も全く不自由となり、筆談帳やラッパのような補聴器を繁く使っていた。ドイツ啓蒙主義的思想=人間的・合理的の自律、人間生活の進歩・改善・幸福の増進の可能性の追求=の風潮盛んなボンで育ち、フランス革命の旗印-自由、平等、友愛の精神に共鳴したベートーヴェンの反骨精神が不屈の創作魂を鼓吹させた事であろう。1827年3月26日、56歳でその生涯を閉じた。

本日演奏する2つの八長調ミサ曲は、フランス革命勃発前の貴族社会支配のもとで生きた神童モーツァルト23歳の作品と、革命後の激動の時代に生きた楽聖ベートーヴェン37歳の作品であるが、ローマ・カトリック教会で神を賛美し、罪の許しを願い、恩寵を祈る儀式で歌う曲であることは共通している。

キリエ(主よ憐れみ給え)・グロリア(栄光)・クレド(我は信ず)・サンクトゥス(聖なるもの)・ベネディクトゥス(祝福されたもの)・アニヌス・デイ(神の子羊)からなる。

しかし、現在私たちの演奏活動では、宗教観を超越して、人類の平和を願う心の普遍性を求め、現実の美しい音楽芸術に触れ、音楽性の美の探究とその達成、演奏するものと聴いて頂く方々と喜びと感動を共有できるような演奏理念を基点としています。

[団長挨拶](#)

[設立
設立の記](#)

[活動実績](#)

[演奏会](#)

[指導者](#)

[団員募集](#)

[練習会場](#)

[合宿](#)

[楽
壇
イベント](#)

[掲示板](#)

[リンク](#)

[松戸混声合唱団トップページ](#)